

地学と切手



アメリカ最初の
石油井完成
100年記念切手

P. Q.

石油についての記事は日本でも西洋でも昔から知られている。そのわりに石油はあまり利用されなかった。それは産油地に限られ 運搬に不便であり 灯油として利用するにはガソリン分が邪魔であった。19世紀の前半は灯油としては鯨油がおもに利用されていた。原油を蒸留してガソリン分を除去し 中間分を集めて灯油を得たのは1853年頃からだった。

アメリカ東部は開拓が進むにつれて 人は次第にアラチア山地に住むようになった。海岸遠くはなれた山中で 人々は生活物資の塩を塩泉に求めた。山脈の西側には高原状の台地があり 天然ガス・石油の湧出とともに塩泉があり 水を煮つめて食塩を製造した。需要が増えると塩泉では間に合わなくなり 深井戸が掘られるようになった。その井戸にしばしば天然ガスや石油が伴っていた。天然ガスは燃料となったが 石油は食塩に不愉快な臭いと味をつけるものとして 「悪魔のタール」と呼ばれ 嫌われた。1818年ケンタッキー州では掘られた塩井から石油が大量に噴出し 火を引いて大火事になった。石油は燃えながら河に流れ込み 下流35マイルにわたって火の河になったという。

1850年代に入ると灯油としての利用も追々に増え ニューヨーク州のセネカで石油を目的とした600フィートの深さの井戸が 1857年に掘られたが これは空井戸だった。同じく1850年代初めに 弁護士ジョージ・ビゼルがペンシルバニア石油会社を作り 同州のタイタスヴィル (Titusville) で石油を汲みとって灯油を製造販売したが これは自然に湧き出して河水の表面に浮んでいる石油を汲みとるだけだった。灯油の製造にはエール大学のシリマン教授 (Benjamin SILLIMAN) が指導したといわれる。やがてビゼルは井戸を掘って石油を汲み上

げようとしたが シリマンは投機的事業としてこれに反対した。2人はついに袂を分かち ビゼルは新しくセネカ石油会社を起こして石油井戸を掘ることにし 井戸掘りの主任としてニューヘヴンニューヨーク鉄道の車掌だった エドウィン・ドレーク (Edwin DRAKE) を起用した。ドレークはそれまで井戸掘りには何の経験もなかったがビゼルは現場に行くドレークを陸軍大佐だったことにしてしまい それがいつか本物になって彼はドレーク大佐と呼ばれるようになった。

1859年5月29日に櫓が組み立てられた。ドレークの下 下の塩井戸職人は ウィリアム・スミスという男だった。工事は難行し8月27日によりやく69フィートに達し のみ先が動かなくなった。翌日スミスが朝早く櫓に行ってみると 口元から2メートル下の所まで石油が来ていた。これが世界最初の成功した石油井戸である。この井戸は1日20バレルの産出がつづいた。

ドレークの成功により人々は争って井戸を掘りはじめ約1年で産出は250倍にも達した。丁度その頃鯨はとり過ぎによって捕鯨業は衰微し 石油は灯油用の本命になった。灯油をとった残りのガソリンと重油はもてあまされ焼き捨てられたり 投棄されたりした。ガソリンが利用されるようになったのは 1883年のダイムラーによるガソリンエンジンの発明であり 重油は1867年のディーゼルによるディーゼルエンジンの発明であった。丁度その頃は石油ランプの強敵として電燈が普及し 石油産業はガソリンと重油の利用により発展をつづけ 第2次大戦後は石油化学の革命により ついには20世紀世界最大の産業となるに至った。

切手は1959年8月27日に発行された4セント切手であり 1859—1959 PETROLEUM INDUSTRY と記されている。

・お知らせ

地質調査所溝ノ日本所の市内局番が 2月9日から次のように変更になりました。

213 川崎市高津区久本135

工業技術院地質調査所

新 電話 (044) 866-3171 (大代)

旧 (044) 86-3171 (大代)

なお 九州出張所の市内局番も48年11月3日から 次のとおり変更になりました。

815 福岡市南区大字塩原アイゾ497-2

地質調査所九州出張所

新 電話 (092) 551-6099

旧 (092) 55-6099